大阪公立大学
Osaka Metropolitan University
学術情報リポジトリ

Comptes amoureux研究(4)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2012-01-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 鍛治, 義弘 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00006098

Comptes amoureux 研究（4）

鍛　治　　義　弘

『恋の物語』*Comptes amoureux* の魅力、文学史的意義が、その散文物語集の形式、フェミニスト思想とともに、そのフランス語散文の文体にもあることは、つとに指摘されており、ペルーズはその華麗さを、レイノルズ＝コーネルは、優雅さ、文章での調和を称揚している[1]。しかし現在までのところアレクサンドル・ロリアン Alexandre Lorian の 16 世紀の散文全体を対象とする研究[2]のジャンヌ・フロールに関する部分やペルーズ版の序論部での扱いを除けば、この問題を十分に検討したものは見られないようである。文体の研究は、16 世紀の散文の展開との関連においてなされる必要があるのだが、私たちはこの問題を『恋の物語』の中の一つの話を比較検討することで始めることにしよう。

取り上げようとするのは『恋の物語』の第５話であり、これは『デカメロン』第５日第８話の著名な地獄の狩りの話の筋にほぼ従う一種の翻訳である。既にこれまでの論で指摘したように、『恋の物語』は枠組をボッカッチョのこの物語集に負っており、フランスではこの物語集は 15 世紀に初めて仏訳されて、ジャンヌ・フロールの作品の刊行後数年で新たな仏訳が出版されている。

15 世紀の仏訳はシャンパーニュ出身のロラン・ド・プルミエフェ Laurent de Premierfait (1360～1370－1418) の手になるもので、プルミエフェは既に　ボッカッチョのラテン語作品、キケロの作品の翻訳を手がけていたが、フランチェスコ会修道士 Antonio d'Arezzo の協力で『デカメロン』の仏訳を開始し、1414 年に完成させた。しかしプルミエフェがトスカナ語を理解しなかったためであろうが、この翻訳は Antonio のラテン語訳から重訳されたものである。その後活字印刷術の発展に伴い 1485 年にアントワーヌ・ヴェラール Antoine Vérard がテクストをかなり改変して刊行し、1541 年までに８版を数えた[3]。

このある意味で不完全な版に不満を覚えたマルグリット・ド・ナヴァールの要請に応えてト

---

[1] Jeanne Flore, *Contes amoureux par Madame Jeanne Flore*, sous la direction de Gabriel-A Pérouse, Presses Universitaires de Lyon, 1980, p.26.<<ils(=Les *Contes Amoureux*) offrent un extraordinaire exemple de style flamboyant.>>

Jeanne Flore, *Contes Amoureux par Madame Jeanne Flore,* éd. par Régine Reynolds-Cornell, Publications de l'Université de Saint-Estienne,2005,p.20-21.<< L'élégance de leur style, leur amour des mots et de leur harmonie dans les phrases, particulièrement lue à haute voix, ne peuvent que plaire au plus revêche des critiques.>>

[2] Alexandre Lorian, *Tendances stylistiques dans la prose narrative française du XVIe siècle*, Klincksieck,1973

[3] Carla Bozzolo, <Introduction à la vie et à l'œuvre d'un humaniste>, dans *Un traducteur et un humaniste de l'époque de Charles VI　Laurent de Premierfait*, sous la direction de Carla Bozzolo, Publications de la Sorbonne, 2004, pp.17-29 ;Henri Hauvette, *Les plus anciennes traductions françaises de Boccace*, Peret & fils, p.72sq 参照。

スカナ語から直接仏訳を行なったのが、ドーフィネ地方 Le Buis 出身で、トスカナ滞在経験もあるアントワーヌ・ル・マソン Antoine Le Maçon であり、1545 年パリの Estienne Roffet より刊行され、16 世紀に 13 回再刊されている[4]。

『恋の物語』の第５話はこの両者の翻訳の間に刊行されているが、オーヴェットの指摘によれば[5]、ジャンヌ・フロールはプルミエフェの訳に従わず、イタリア語のテクストから訳したと考えられ、かなり忠実にボッカッチョの物語に従っている。

本論は、これらの翻訳を通して、ジャンヌ・フロールの作品の文体をできるだけ明らかにすることが目的であり、翻訳論として論ずることは主眼ではないが、手始めにそれぞれの翻訳の特徴を概観しておこう。例えば『デカメロン』の次の短い一節にもボッカッチョ（あるいはイタリア語散文）の特徴がいくつも指摘できよう。

Perseverando adunque il giovane e nello amare e nello spendere smisuratamente, parve a certi suoi amici e parenti che egli sé e'l suo avere parimente fosse per consumare;[6]

冒頭のジェルンディオ Perseverando を用いた節の結合、e nello amare e nello spendere、suoi amici e parenti、sé e'l suo avere の多項表現、実詞化された不定詞 amare、spendere、 avere の使用、-mente の副詞 smisuratamente、parimente、イタリア語独特の表現 fosse per＋不定詞、文末に consumare を置くことによる直接目的補語の前置などが、一見しただけで観察される。この一節はフランス語ではそれぞれ以下のように翻訳される。

Tandiz doncques Anastaise perseveroit en amour et en despense oultrageuse, il sambla a aulcuns de ses amis qu'il gasteroit soy mesme et pareillemant ses biens.[7]

プルミエフェの翻訳はラテン語からの重訳としては原文に忠実であるが、aulcuns de ses amis とだけあり、parenti は訳されていないし、文頭のジェルンディオ構文は従属接続詞の使用で置き換えられている。

Or doncques perseverant le jeune gentilhomme en son amour commencée, et en ses despences demesurées, bien veirent ses parens et amys, qu'en peu de jours il auroit tout despendu :[8]

『恋の物語』では e nello amare e nello spendere の二項表現を翻訳する際に、名詞化した amour に commencée が付加されているが、前置詞＋所有形容詞＋名詞＋過去分詞の構文が繰り返されており、節の均衡 balancement des propositions を狙ったものと考えられよう。また en peu de jours が付加されているのはイタリア語の fosse per+不定詞に近づけようとの配慮であろうか。sé e'l suo avere は tout にまとめられてしまっているが、構文を変化させて動詞を文末においている。

---

[4] Henri Hauvette, op.cit, p.73sq 参照。

[5] Ibid., p.113

[6] Giovanni Boccaccio, *Decameron*, a cura di Vittore Branca, Oscar Mondadori, <Oscar Classici Mondadori>, © 1985, p.482.以下『デカメロン』の引用・言及はこの版により、Ｂで略称する。

[7] *Decameron*, traduction(1411-1414) de Laurent de Premierfait par Giuseppe di Stefano, CERES, 1998, p.660. 以下プルミエフェの翻訳の引用・言及はこの版により、Ｐで略称する。

[8] Jeanne Flore, *Contes amoureux par Madame Jeanne Flore*, sous la direction de Gabriel-A Pérouse, Presses Universitaires de Lyon, 1980, p.185.以下『恋の物語』の引用・言及はこの版によりＣＭと略称する。

また commencée と demesurées が脚韻を踏み、en(an)が幾度も繰り返されていることにも留意しよう。

Persévérant doncques Anastaise en son amour, et en ses despences desmesurées, il sembla à aucuns des ses parens et amys qu'il consommoit et sa personne et son bien,[9]

ル・マソンの翻訳は、ル・マソン自身が序文で述べるように[10]、トスカナ語の原文に何も加えず何も省略しないように心がけているのであろう、意味的には一番忠実な正確な翻訳といえるだろう。しかし不定詞を実詞化して用いることはないし、-mente の副詞の一方は形容詞に置き換えられ、他方は表現されていない。

さて以下に、各話の枠組みの部分や語り手の導入部分は除く、地獄の狩りの物語本文の比較を通して、『恋の物語』の文体を検討するが、統辞と語彙の面から分析を行ない、この両面はロリアンの埋め込みと誇張の検討に重なることになろう。

統辞面の検討の第一として文中の語順を考えよう。ボッカッチョのイタリア語の語順が大層自由であることは、一読して見てとれる。例えばいわゆる平叙文で動詞の後に主語が後置される箇所は、『デカメロン』の当該部分で 19 箇所確認される。これに対してプルミエフェでは 15 回、『恋の物語』では 23 回、ル・マソンでは 6 回の主語の後置がある。『デカメロン』、プルミエフェ、『恋の物語』、ル・マソンの当該部分の人称法の数（命令形を除く）は、それぞれ 213,276,250,251 であるので、倒置の割合は、ボッカッチョ 8.9%、プルミエフェ 4.4%、『恋の物語』9.2%、ル・マソン 2.3%となる。さらに人称法の主語が現在のフランス語の基準からして省略されていると見なされる場合が、『デカメロン』で 67 回、プルミエフェで 17 回、『恋の物語』で 39 回、ル・マソンで 13 回数えられるので、これらの数を人称法の数から引いたもので倒置の割合を出すと、『デカメロン』13%、プルミエフェ 6.1%、『恋の物語』10.9%、ル・マソン 2.5%となる。Christiane Marchello-Nizia によれば中期フランス語では、従属節ではほぼ主語—動詞の語順が一般化し、独立節あるいは主節ではこの語順が 52%から 75%程度であるので[11]、この四人の文ではかなり低い割合となろう。しかしその中でもボッカッチョとジャンヌ・フロールのグループとプルミエフェ、ル・マソンのグループの間には有意な差が認められよう。メグレがフランス語固有と見なす、主語＋動詞＋補語の語順を守る必要性を強調する[12]16 世紀半

---

[9] *Le Décaméron de Boccace*, Traduction complète par Antoine Le Maçon, Isidore Liseux, 1879, Tome IV,p.48.以下ル・マソンの翻訳の引用・言及はこの版により、ＬＭと略称する。なおこの版は 1551 年 Guillaume Rouille 版によるものである。

[10] <<lesquelles je laissay voir après, tant à ceux de la nation Tuscane, que de la nostre, qui tous ne firent acroire qu'elles estoient (sinon bien) au moins très-fidellement traduites. Parquoy me laissant ainsi doucement tromper (si tromperie y a), je me suis depuis mis à le commencer par un bout, et finir par l'autre : ayant en toute ma traduction prins peine de ne dire en nostre langue plus ne moins que Bocace a faict en la sienne.>> *Le Décaméron de Boccace*, Traduction complète par Antoine Le Maçon,Isidore Liseux, 1879,Tome I,pp.5-6。

[11] Christiane Marchello-Nizia, *Histoire de la langue française aux XIVe et XVe siècles*, Bordas, ©1979,p.331

[12] Mireille Huchon, <<Le prose d'art sous François Ier : illustrations et conventions>>, in *R.H.L.F.*, 2004, n.2, p.292

ばに近いル・マソンの翻訳で、倒置が極めて低い割合であることは当然であろうが、同時期の『恋の物語』が 15 世紀初頭のプルミエフェの翻訳よりも主語の後置割合がずっと高いのは大変興味深い。つまりジャンヌ・フロールは主語＋動詞の語順の割合が増加してくる傾向に反して倒置を用いており、これはボッカッチョの文、イタリア語の模倣の現れとも見ることもできよう。

さらには Colombo Timelli が 16 世紀のイタリア語では認められるが、フランス語では守るのが難しい構文と指摘する[13]、複合時制あるいは受身形での助動詞と過去分詞の間への挿入でも、小規模ながら同様の傾向が見られる。即ちボッカッチョはこの構文を３回用いるが、そのうち同じ箇所を１回プルミエフェ、『恋の物語』、ル・マソンは再現し、さらにプルミエフェは新しく１度使用し（『恋の物語』、ル・マソンはこれを採用しない）、『恋の物語』では９回新規の構文が導入され、うち１回をル・マソンは繰り返し、ル・マソンも５回新たに作り出している。総計ボッカッチョ３回、プルミエフェ２回、『恋の物語』10 回、ル・マソン７回この表現を用いている。回数でこそル・マソンは『恋の物語』に続くが、挿入される語句は rien を除けば、jamais、tousjours などの回数を表す副詞や pareillement, cruellement の様態を表す副詞であり、現在の規範とは大きくかけ離れていない。しかし、『恋の物語』では<<et sont mes cruelz chiens repeuz>>(p.188), <<elle avoit chacune chose distinctement veuë et ouye>>(p.191), <<il eust sa mere occise>>(p.191)のように名詞主語や名詞直接目的語が挿入されており、きわめて特異な語順を作っている。

その他ボッカッチョでしばしば見られる属詞－動詞の語順（７例）、過去分詞＋助動詞の語順（10 例）、名詞補語＋動詞（６例）、さらには不定法＋人称法の語順（３例）については、プルミエフェが幾分ボッカッチョに従うが（順に４例、１例、１例、０）、16 世紀の仏訳ではほとんど見られない（順に、『恋の物語』で１、０、０、０、ル・マソンで１、０、０、０）。ただ『恋の物語』には名詞の補語＋名詞の語順が１例ある。

以上見たように『デカメロン』の語順は極めて自由で、それによりほとんど奔放といってよいほどのしなやかな文体を構成している。そしてこの面でボッカッチョにより近いのはまだフランス語の語順の自由度が高かったであろう 15 世紀のプルミエフェよりもむしろ 16 世紀の『恋の物語』であり、『デカメロン』に忠実であろうとするル・マソンはもはやボッカッチョの自由さを再現することはできない。

しかしフロールはこうした自由を別の目的にも用いた。ボッカッチョの<<quanto più la speranza mancava, tanto più multiplicasse il suo amore>> (p.482)をフロールは<<tant que l'esperance de jamais en jouyr deffailloit, d'aultant se multiplioit l'amour dedans son ame dolente.>> (p.185) と『デカメロン』の語順を尊重してフランス語に移したが、ここに見られるのは主語＋動詞、動詞＋主語の交錯配語法であり、『恋の物語』では de jamais en jouyr, dendans son ame dolente が付加さ

---

[13] Maria Colombo Timelli, <La première édition bilingue de l'Histoire d'Aurelio et d'Isabel (Gilles Corrozet, Paris, 1546) – ou : Quelques problèmes de traduction d'italien en français au XVIe siècle>, dans *Traduction et adaptation en France à la fin du Moyen Age et à la Renaissance*, Champion, 1997, p.309

れることで、ほぼ同じ音節数となる前・後半の句それぞれで an, en が３回づつ繰り返されている。

さらには<<Par ce moien obtint Nastagio de ses doulces amours la jouyssance.>>(CA, p.191)では主語、動詞と名詞、名詞補語の二重の倒置が見られ、注意を引き、文末に jouyssance を置くことでナスタジオの享受を強調し、地獄の狩りの話をうまく締めくるだけでなく、10 音節づつの二句の前半は o 後半は ou が３回反復され、響きのよい文をつくりあげている。このようにフロールは語順の自由さを文の装飾と音の響きのために巧みに利用している。

次にロリアンがそれぞれ分析的、総合的、混合的埋め込みの手段とした、接続詞（句）、分詞、関係代名詞の用方を見てみよう。

節と節、文と文を関係付ける明確な印である接続詞（句）および一部の副詞（句）はボッカッチョではそれほど目立たないようだ。多用される e と名詞句を導く che を除けば、等位接続詞の ma（10 例）、従属接続詞句では si come のような様態を表現するもの(９例、４種)、perche などの原因を表すもの（９例、４種）がわずかに目を引く程度である。これらはフランス語の翻訳でもほぼ同じ傾向であるが（Ｐ：mais 8 ；原因１；様態 13，４種．ＣＡ：mais 10；原因６、４種；様態 14、５種．ＬＭ：mais５；原因７、５種；様態 13、２種)、それぞれの翻訳者の好みも存在する。プルミエフェは三者の中では最も多くの接続詞（句）を用いており、とりわけ quant などの時の接続詞（句）(23 例、７種。Ｂ：４、２種。ＣＡ：７、３種。ＬＭ：10、４種）と副詞 aprés 及び他の語との複合表現（８例）を多用し、等位接続詞の car もかなり多い（７例。ＣＡは５、ＬＭは３)。『恋の物語』では等位接続詞 or にもかなり頼っている（５例。Ｐは２、ＬＭは１)。こうした結果が示すところはとりあえず以下のようになろうか。ボッカッチョと、この面でもボッカッチョに倣うル・マソンはあまり分析的埋め込みを使用しない。プルミエフェが最も分析的埋め込みを愛好しているが、それはまだ論理的関係を複雑に組み合わせるものではなく、時の関係を示す素朴なものに留まっている。『恋の物語』もプルミエフェと同様な傾向にあるが、ジャンヌ・フロールは、以下の関係代名詞の分析で見るように、時よりは原因・結果などの関係をむしろ重視している。

『デカメロン』の当該部分には現代イタリア語の現在分詞は使われておらず、ジェルンディオのみであり、また 16 世紀のフランス語ではジェロンディフと現在分詞の使い分けはまだはっきりしないので、以下ではジェルンディオ、動詞の-ant 形（語形の異形を含むが、形容詞および付加形容詞としての用法を除く)、過去分詞を検討の対象とする。まず使用数を挙げておこう。ボッカッチョはジェルンディオを４２回使用し、プルミエフェ、『恋の物語』、ル・マソンはそれを順に 12 回、13 回、37 回-ant 形で翻訳している。またプルミエフェは新たに 10 回-ant 形を使用し、そのうち『恋の物語』は２回、ル・マソンは１回-ant 形で受けている。『恋の物語』も 16 回新たに-ant 形を使用するが、ル・マソンはこれらの-ant 形を採用しない。ル・マソンも 13 回新たに-ant 形を用いる。総計ボッカッチョでは 42 のジェルンディオが使用され、-ant 形はプルミエフェに 22、『恋の物語』に 31、ル・マソンに 50 出現する。

過去分詞（受動態と複合形を形成するものは除く）はボッカッチョで 31 回使用され、そのうちプルミエフェは６回、『恋の物語』は５回、ル・マソンは６回を採用する。ただしル・マソン

では『デカメロン』でのこの過去分詞を現在分詞複合形で翻訳する場合が８回、-ant 形で翻訳する場合が１回ある。(上の新たに-ant を使用する場合に含まれる。) プルミエフェとジャンヌ・フロールはそれぞれ２回、９回新たに過去分詞を用いるが、これらは他の翻訳では見られない。過去分詞の総計の使用度数は『デカメロン』31、プルミエフェ８、『恋の物語』14、ル・マソン６である。

この数字が示すとおり、ボッカッチョとル・マソンは圧倒的に多数の分詞形を使用しており、二人の文体は総合的埋め込みを好んでいる。これに対してプルミエフェとジャンヌ・フロールはボッカッチョでの分詞の構文を接続詞＋人称法でかなりの数翻訳しており、先の接続詞のところで見たように、むしろ分析的埋め込みを志向する。

『恋の物語』はボッカッチョに次いで過去分詞を多く用いているが、ここにはかなり興味深い問題が存在している。それは意味上の主語の位置の問題である。ジャンヌ・フロールが新たに用いた過去分詞のうち４例は主語と同格（ただし一つの主語は表現されていない）で、残る５例は所謂絶対分詞で、その中に次の文例がある。

où passée quasi la cinquiesme heure du jour, (p.186)

et à peine servi le dernier mets, (p.190)

前例の方が理解しやすいだろうが、この二つの過去分詞はそれぞれ後に来る heure, mets と一致しており、フランスではこれらがこの過去分詞の主語と見なされ、主語が後置されていることになる。ところで坂本鉄男の『現代イタリア語文法』によれば[14]、イタリア語では従属節をつくる過去分詞の場合、essere を助動詞とする自動詞の過去分詞は主語の性・数に一致し、主語は過去分詞の後に置き、直接目的語を伴う他動詞の過去分詞は直接目的語の性・数に一致するので、形式的には直接目的語を主語とした受動態節のようになる。『恋の物語』の上の２例はイタリアでは直接目的語を伴う他動詞の場合となろう。こうした用法はボッカッチョにも見られたのだが、大分部の場合フランス語では人称法に変えて翻訳されている。しかし次のような興味深い例がある。

rotto il suo dolce pensiero, (B,p.483)
Anastaize, enterompuz en son doulz pensemant, (P,p.661)
Parqouy entrerompu son doulx penser, (CA,p.186)
, qui luy fit rompre le doux penser (LM,p.50)

il quale, finito il suo ragionare, (B,p.484)
Le chevalier aprés finee sa parole (P,p.664)
lequel finies ses raisons avecques Nastagio (CA,p.188)
lequel, quand il eut achevé son parler, (LM,p.53)

La qual cosa al suo termino fornita (B,p.486)

---

[14]坂本鉄男　『現代イタリア語文法』　白水社　1979 年　278 頁

Mais aprés la besoigne finee (P,p.666)

Après que le chevalier eust achevé celuy horrible spectacle (CA,p.191)

Ceste choses finie (LM,p.56)

第三の例の名詞＋過去分詞の語順は、現代イタリア語の規則では破格なのだろうが、フランス語ではむしろ規則的と感じられるのか、プルミエフェもル・マソンも同じ語順で過去分詞構文を採用する。しかし第一第二例の過去分詞＋名詞（イタリア語では目的語、フランス語では主語と解されるべきであろう）をル・マソンは関係代名詞節と接続詞節で置き換える。プルミエフェは第二例では過去分詞を後続する parole に一致させているが、第一例では過去分詞は何に一致するか分らず、まったくの破格構文になっている。ジャンヌ・フロールは第三例こそ接続詞節に変えたが、第一例、第二例では後続する名詞に過去分詞を一致をさせている。このように見てくると、中期フランス語にも過去分詞の主語に対する後置の例はあるが[15]、あれほどボッカッチョに忠実なル・マソンが一つもこうした構文を取らないことから見てこの構文が 16 世紀では非常に稀になっていたと思われ、『恋の物語』の例はイタリア語の構文を模倣したものと考えることができるのではないか。

埋め込みに関わるものとして、ロリアンが混合的埋め込みの道具とする関係詞を検討しよう。ロリアンは関係詞を制限的、説明的用法である qui の系列と付加的用法である lequel の系列に分けて考察しており[16]、イタリア語ではそれぞれ che と quale にあたると考えてよいだろう。こうして qui, lequel,その他で分類してみると以下の結果になる。

	B	P	CA	LM
qui,que,quoi(it.che,chi)	20	18	25	38
lequel(it.quale)	28	9	11	16
うち前置詞なしの形	16	3	6	8
その他(dont,où など)	5	3	14	10
計	53	30	50	64

プルミエフェ、『恋の物語』、ル・マソンの該当部分の語数はそれぞれ 2301、2528、2193 であるので、ロリアンが出した関係詞の出現度数と比較するために 10000 語当りの関係詞の出現度数推定値を計算すると、プルミエフェは 130、『恋の物語』197、ル・マソン 291 となる。これらの数字をロリアンの 16 世紀の散文物語標本の平均値 232.2[17]と比べてみれば、ル・マソンがかなり平均値を上回り、『恋の物語』はほぼ平均並み（ロリアンが『恋の物語』の初めの 10000 語に対して出した結果と一致する）、プルミエフェは平均を大きく下回ることが一層明確になる。ル・マソンがこうして関係節を多用するのは原典である『デカメロン』で既に豊富に使用されていてそれを忠実に翻訳したことが大きな理由であり、qui,lequel の両系統ともに使用回数が多

[15] Christiane Marchello-Nizia, op.cit., p.340 に挙げられている例。 Considéré ces choses, m'adventuray de dire au roy que... (Commynes, III, p.224)

[16] Lorian, op.cit., p.223sq.

[17] Ibid., p.313

いが、過去分詞節を関係節に書き直すこともあり、ボッカッチョよりも数が増している。プルミエフェは逆に『ボッカッチョ』での quale 系例の関係詞を、特に文頭にあるとき、そのまま lequel 系列で受けずに、名詞に戻して翻訳している例が多く、そのため使用が少なくなっている。つまりプルミエフェはロリアンの言う lequel の延長の前触れである用法をほとんど用いない[18]。『恋の物語』での関係代名詞の使用は、ボッカッチョの用法に、ル・マソン程ではないにしても、かなり忠実である。しかしジャンヌ・フロールは他の二人の翻訳者が用いなかった関係詞を多く使っている。それはその他の中に分類した文頭に置かれる dont で、7度現れる。この関係詞をロリアンは文頭での quoi, (ce) qui, (ce) quoi と並べて中立的接続語 conjonctif neutre とし、その機能は二つの述部が分離されたり無造作に並置されるのを防ぎ、事象が因—果の配列に従い、論理的に連鎖するのを強調することにある、と主張する[19]。ジャンヌ・フロールの場合も、曖昧ではあるが前節の内容を受けてその結果を示すために用いられており、接続詞の折に指摘した、文と文の間に論理関係を結ぼうとする傾向の現れである。

以上の接続詞（句）節、分詞節、関係節の検討から、埋め込みの型の違いが明瞭になる。プルミエフェは素朴な分析的埋め込みを使用し、特に時の関係を示そうとする。一方ル・マソンはボッカッチョに倣い、総合的、混合的埋め込みを好み、短縮しながら引き延ばす手法をとる。しかしル・マソンの場合は 1550 年以後の作家が実践する過剰な引き延ばし、人工性に陥ることはない。『恋の物語』は、『デカメロン』に見られるイタリア語的分詞の用法もあるが、むしろ混合的、分析的埋め込みを志向し、論理的関係、因果関係を示そうとする。

さらにこうした埋め込みの方法の違いだけではなく、ボッカッチョの文の効果を確かめるために、一例を挙げよう。

Nastagio, *udendo* queste parole, tutto timido divenuto e quasi non *avendo* pelo addosso che arricciato non fosse, *tirando*si adietro e *riguardando* alla misera giovane, comminciò pauroso a aspettare quella che facesse il cavaliere ; il quale, finito il suo ragionare, a guisa d'un cane rabbioso con lo stocco in mano corse addosso alla giovane, la quale inginocchiata e da' due mastini tenuta forte gli gridiva mercé, e a quella con tutta sua forza diede per mezzo il petto e passolla dall'altra parte. Il qual colpo come la giovane ebbe ricevuto, così cadde boccone sempre *piagnendo* e *gridando* : e il cavaliere, messo mano a un coltello, qualla aprì nelle reni, e fuori trattone il cuore e ogni altra cosa da torno, a'due mastini il gittò, li quali affamatissimi incontanente il mangiarono. (pp.484-485)(souligné par nous)

この地獄の狩りの、騎士が自分に残酷であった女の体を切り刻み心臓を抉り出し、犬に投げ与えるシーンで、多用されるジェルンディオと過去分詞は、接続詞を用いて時間論理関係を示すのとは異なり（接続詞は e と come しか用いられていない）、主語や直接目的語の位置の変化による自由な語順ともあいまって、屈曲することなく情景を前へ前へと展開するのに寄与し、ジェルンディオの同音の語尾の繰り返しは動的なリズムを刻んでいる。また文頭に置かれた il

---

[18] Ibid., p.236
[19] Ibid., pp.253-257

quale,la quale, li quali の関係詞も、代名詞主語が一つもないにも拘わらず、騎士、女、騎士、犬へと目まぐるしく変化する行動の主体を、二度用いられる指示代名詞 quella の働きも借りて、明示しながら、主語、直接目的語の動詞に対する後置、前置などの自由な語順ともあいまって、文を前に進めるのに大きな役割を果している。素早く力強い文体の見本と言える。

紙幅の関係で挙げることができないが、プルミエフェの翻訳ではジェロンディフと過去分詞のいくつかは接続詞節に置き換えられ、ことに接続詞副詞の aprés が4回使用されて前後の関係を示し、また il quale は先行節で主語の動詞への後置を行なわなかったためであろうが、用いられず、名詞を繰り返している。ル・マソンの翻訳ではジェロンディフ、過去分詞はほぼそのまま-ant 形と過去分詞に保たれ、il quale,la quale, li quali はそれぞれ lequel,laquelle,lesqulz に受け継がれたが、finito il suo ragionare は接続詞節に置き換えられ、Il qual colpo come la giovane ebbe ricevuto の直接目的語の前置も通常の語順に戻されている。

この部分は『恋の物語』では以下のようになる。

Adoncques se tira arriere Nastagio si timide, craintif et estonné que tous les cheveux de la teste luy dressent, et regardant vers la miserable Damoiselle commence paoreux à attendre à ce que feroit le Chevalier : lequel finies ses raisons avecques Nastagio, comme ung chien enragé, ayant son espée nuë en la main courut sus à la miserable femme : laquelle à genoulx et retenuë des deux mastins piteusement requeroit pardon. Mais ce rien ne luy vallut : car le chevalier de toute sa force la frappa parmy l'estomac, tant qu'il la jecta par terre. Cependant l'infelice ne sçavoit que plaindre piteusement pour tous secours. Puis le chevalier sacca ung cousteau pendant à sa seincture, et d'iceluy luy ouvrit les rains, et luy tira hors le cœur du ventre, et le jecta (chose horrible et stupende à veoir) à ses deux cruelz et affamez mastins qui en peu d'heure eurent tout devoré. (CA, pp.188-189)

ジャンヌ・フロールは il quale,la quale の二つの関係詞はそのまま lequel, laquelle で受けて文頭に置き、三つ目の li quali は qui に変化させたが、先行詞 mastins が直前にあり、先行詞に迷うことはなく、後続する節で en peu d'heure を付加したので動作の順序が逆になることもなく、ここでの前過去は単純過去の直後に迅速に完了した行為を表現していると解されるべきであろう。『デカメロン』でのジェルンディオ、過去分詞は省略されたり（*udendo,gridando ;* divenuto）、人称形に置き換えられたり、前置詞句に変化させられたりする（inginocchiata ; à genoulx）が、語順を変化させたり、si~que、tant que の相関表現を用いて、行為の順序を文の展開にあわせる工夫も見られる。finito il suo ragionare をル・マソンは接続詞節に変更したが、ジャンヌ・フロールはプルミエフェ同様主語を後置した絶対分詞の形で維持している（プルミエフェでは接続詞 après が付加されている）。Adoncques、Mais、car、Cependant、Puis のボッカッチョが使用しない接続詞副詞を付加して、時、原因、対照などの文の関係付けを行なっている。また et luy の反復によって行為を強調するとともに、同じ音節数の二つの句にリズムを与えている。また原典にはない挿入節に現れる形容詞 stupende はラテン語 stupeo から来たイタリア語の形容詞 stupendo に対応すると思われ、16 世紀でも極めて稀なものである。この一節はイタリア語法の影響を受けながら、むしろ分析的混合的埋め込みを用いるが、明瞭でつながりがかなり滑らかな文体を提示していよう。

語彙面での文体分析として先ずは二項表現 binôme, redoublement, dittologie（及び多項表現 polynôme）を採り上げよう。このルネサンスのエクリチュールの一特徴は、ロリアンの定義では、「同一の構文上の機能の、従って等位の道具によって結ばれる、同じあるいは相当する文法的性質の二つあるいはいくつかの用語で構成される言語表現」[20]とある。そして項の関係が類義、隣接、反意のものを扱っており、私たちもそれに従うことにしよう。

ロリアン 75—76 頁によれば、この表現の使用頻度は、10000 語に対して、クレンヌ 240 以上、ボエスチュオー220 以上、フロール 160 以上、ブラントーム 135 以上であり、フロールは最も多いグループに属する。そしてボッカッチョの原文でも多く用いられており、当該の部分には 55 箇所見られる。そしてそのうちプルミエフェは 44 を、『恋の物語』では 26 を、ル・マソンは 47 を再現している。さらにボッカッチョがこの表現を用いなかったところで、プルミエフェは 25（内『恋の物語』は５を、ル・マソンは３を再現する）、『恋の物語』は 35（ル・マソンはこのうち一つも採用していない）、ル・マソンは一つ新しく用いているので、総計ボッカッチョは 55、プルミエフェは 69、『恋の物語』では 66、ル・マソンは 51 個の用法を数えることになり、それを 10000 語あたりの推定値で示せば、プルミエフェ 299、フロール 267、ル・マソン 232 であり、いずれも極めて高い頻度である。しかしル・マソンとプルミエフェは元来ボッカッチョが使用したものをフランス語に直した例が多く、『恋の物語』には『デカメロン』にない付加された部分がかなりあるとはいえ、ジャンヌ・フロールが作り出した表現の数はやはり注目に値する。

この二項表現は中世以来見られるのものであり、その発展において翻訳との深い関係が指摘されている。原語の意味を二重化 redoublement して説明するのである。この一節でもプルミエフェの翻訳ではこうした二重化が特徴的に当てはまる。例えば<<prendendo speranza con le sue opere>>(B, p. 481)の場合には、<<Anastaise eust esperance en ses œuvres et atours (P, p.659)>>と opere の内容を具体化しているし、原文の意味１語でカヴァーできない場合は、<<in molti et varii ragionamenti >>(B, p.486)を<<en maints et divers pensemens et paroles >>(P, p.666)と翻訳するように、raginamenti を pensemens et paroles と二語で表現するのである。

『恋の物語』の場合は、ソッツイが指摘するように[21]、この二項表現には何よりも強調 emphase の意図が働いている。例えば、『デカメロン』の<<E così dicendo, i cani, presa forte la giovane ne'fianchi, la formarono, >>(p.483)という部分をジャンヌ・フロールは次のように翻訳した。

---

[20] Lorian, op.cit.,pp.65-66<< Par polynôme, il faut comprendre une expression linguistique composée de deux ou plusieurs termes de nature grammaticale égale ou équivalente (deux ou plusieurs noms, adjectifs, etc. ; ou bien adjectif et complément du nom,adverbe et locution adverbiale, verbe et locution verbale, etc.), de fonction structurale identique (deux ou plusieurs sujets, prédicats, objets, etc.) et reliés par conséquent par un outil de coordination(conjonction ou succédané de conjonction), normalement préposé au dernier terme du polynôme.>>

[21] Lionello Sozzi, <Boccaccio in Francia nel Cinquecento>, dans Il Boccaccio nella Cultura francese , a cura di Carlo Pellegrini, Leo S. Olschiki, 1971, p.310. <<Rispetto alla più lineare ed incolore traduzione del Le Maçon, quella di Jeanne Flore si pone ad un livello piu impegnato e persegue un intento più enfatico con un gusto evidente dei contrasi e degli effetti orrorosi. Quest'enfasi patetica è ottenuta, molto spesso, con un tipico sdoppiamento aggettivale o verbale :>>

En ce disant, les *horribles et enragez* chiens acconsuyrent la *pauvre miserable* damoiselle et chascun d'eulx la print par les flans, et y plongerent leurs *envenimées et cruelles* dens, (CA, p.187)(souligné par nous)

ボッカッチョが何らの形容もしていない犬と女は二項表現で修飾され、さらには歯を押し当てる様を再び二項表現の形容詞を含む文で付け加えている。さらにこの箇所だけではなく、若い女に襲いかかり噛み付く犬には、新たに形容語を付け加えて幾度も二項表現に仕立て上げ、その恐ろしさを演出する[22]。また初めて騎士が登場する場面では、犬、騎士、馬に<<deux gros mastins noirs et hydeux>><<ung chevalier armé d'armures noires>><<ung cheval horrible et noir>>(CA, p.186)と「黒い」を繰り返し、そのうち二つは二項表現を用いていており、対になる形容詞の意味ともあいまって、無気味さを一層際立たせる[23]。

二項表現は形容詞を用いる例が最も多数であるが、『恋の物語』ではそこに著しい特徴がある。それは先ほどの引用でも見られた horrible が多用されることである。ジャンヌ・フロールは horrible 含む二項表現を６回も繰り返す[24]。こうした特定の形容詞の偏愛はエピソード全体の調子にも関わると思われる。そもそもこの地獄の狩りの主調音は女の「残酷さ、つれなさ」とその応報としての罰の「残酷さ、苛烈さ」であると考えられ、ボッカッチョではこの主要観念を表す形容詞 crudel とその派生語が頻出する[25]。『恋の物語』でもこの傾向は変わらず、むしろ強められている[26]。しかしフランスの作家はそこに新たに別の倍音を添えているように感じられるのだ。それがこの horrible であり、地獄の狩りの主役達の「恐ろしさ」を際立たせようとしている[27]。

こうして二項表現は女の懲罰シーンの描写に頻出し、悲痛と恐怖を強調し、物語の調子にも大きく影響を与えているが、また別の働きも認められる。既に挙げた<<en son amour commencée, et en ses despences demesurées>>の引用に際しても述べたが、ここには節の均衡を計る対句的処理が認められ、また各句の最後が脚韻を踏んでいる。ことに同音の反復は『デカメロン』にも見られ、イタリア語では形容詞が同音で終ることが多く、またジェルンディオを用いて二項表現にすることもしばしばなので、ボッカッチョはより容易にこうした技法を使用できる。フランス語の翻訳でも、ル・マソンのようにボッカッチョにいわば機械的に倣えば、-ant 形で同じ効果を挙げることができる。ジャンヌ・フロールは扱いやすい<<tant fut il d'iceulx sollicité et importuné>>(p.186)<<tout esmerveillé et estonné>>(p.186)の過去分詞を用いるだけでなく<<Dont

---

[22]<<deux gros mastins noirs et hydeux>>(CA,p.186):<< due grandi et fieri mastini >>(B, p.483);<<mes horribles et cruelz chiens(CA,p.188)>>:<<questi cani>>(B,p.484)>>;<<deux cruelz et affamez mastins>>(CA,p.189)>>:<<due mastini>>(B, p.485)

[23] ボッカッチョでは<<due grandi e fieri masitini>><<corsier nero>><<cavalier bruno>>(B, p.483)であり、犬には nero はつかず、騎士は nero ではなく bruno と形容される。

[24] 既に例文などで示した以外には、<<horribles et estranges clameurs>>(p.190) <<le bruyt horrible et espoventable>>(p.190)。

[25] crudel 5, crudelemente 2, crudelta 2, cruda 1

[26] cruel 13 cruaulté 2 cruellement 2

[27] horrible は二項表現の６回を含めて計 10 階出現するが、どれも『デカメロン』にはないものである。

se treuvant desarmé et sans espée(p.187)>>のような工夫を行なって語末での同音反復を実現している。

実詞化された不定詞に関しいては、プルミエフェが piacere を、既に 12 世紀には実詞化していた plaisir で翻訳した以外は、amare, spendere, avere, ragionare の実詞化された不定詞は三つのどのフランス語訳でも名詞で翻訳され、新たに用いられる実詞化された不定詞 pouvoir, vouloir（以上プルミエフェ）、penser（フロール）、parler（ル・マソン）も中世に既に実詞化していたものである。イタリア語でもフランス語でもかなりの頻度で出現するラテン語の女性形形容詞＋mente に起源をもつ-ment 形（イタリア語-mente 形）の副詞は、ボッカッチョも三人のフランス人翻訳者もかなりの多用している。ボッカッチョはもともと 17 回使用しており、それをプルミエフェは 10 回、『恋の物語』は６回、ル・マソンは 11 回再現する。プルミエフェは新たに 12 回用い、同じ箇所でル・マソンは２回使用する。『恋の物語』でも新たに 20 回使用され（ル・マソンはそれを用いない）、ル・マソンも４回新たに用いる。総計ボッカッチョは 17 回、プルミエフェは 22 回、『恋の物語』は 26 回、ル・マソンは 17 回この形を用いている。フランス語訳に出現するものは既に中世に出現していたもので新たに作り出されたものはない。ジャンヌ・フロールが最も使用回数が多いのは、先の二項表現で指摘したのと同じ理由であり、奇妙なことにボッカッチョが用いる crudelmente（２回）は省略してしまう（プルミエフェとル・マソンはそのまま対応する形を採用する）のに、犬が女を襲う場面などで、イタリア語版にはない箇所で cruellement（２回）、piteusement（３回）の感情的な副詞を付加して悲惨さを強調するからである。ボッカッチョが４回用いる issimo 形の最上級を三人の翻訳者はどれも採用しない。ジャンヌ・フロールは他の話では用いていた(grandissime, p.117 ;promptissime, p.130)のだから、用いないことにむしろ理由さぐるべきであろうか。

最後に『恋の物語』に付加された部分を検討しておこう。ジャンヌ・フロールの物語は大筋ではボッカッチョに倣いほぼ翻訳と言ってよいが、大きな改変付加も見られ、それは次の二つの側面を持つ。一つは地獄のミノスの審判などの神話や歴史への言及であり、ジャンヌ・フロールが頻繁に行なう手法であるが、むしろこの話では数が少ない。これをロリアンはレトリックの文彩の一つとしていることを付言しておこう[28]。もう一方は女が騎士と犬に襲われるシーンの反復である。この場面はナスタジオの眼前で展開されるだけでなく、騎士の女を襲う理由を説明する語りのなかでも触れられ、また多くの人々を招いた饗宴の後でも繰り返される。ボッカッチョはことに人々の前で展開される場合はごく簡略化して<<Videro la dolente giovane e'l cavaliere e'cani ;>>(B,p.486)と述べるのだが、『恋の物語』では<<commencerent veoir à travers le boys la doleureuse chasse, la damoiselle fuyante, les chiens qui jà presque la tenoient, et le Chevalier criant et venant >>(CA,p.190)となる。ジャンヌ・フロールはすでに語られたのと同じシーンの反復を「悲痛な狩り」と要約しながら、ナスタジオが最初に見た順序で女、女に噛み付く犬、

---

[28] Alexandre Lorian, <La phrase poétique dans la prose française du XVIe siècle>, in *Travaux de Linguistique et de Littérature,* Centre de philologie et littérature romaines de l'Université de Strasbourg, XI, I, 1973, p.486.

騎士を登場させ、-ant 形と関係代名詞による説明を付加して、地獄の狩りの内容を要約反復してみせる。これはこのシーンの強調でもあるが、敷衍の例とも見なせるだろう。

以上のようにジャンヌ・フロールは、『ボッカッチョ』の翻訳である第五の話では、比較的自由な語順、分析的混合的な埋め込み、二項表現による強調を通じて、エピソードの劇的な側面を強調しながら、かなり素早くしなやかで、十分明瞭で、非常に装飾的な文体を作り上げているが、そこには文彩、殊に諧調への配慮が大いに働いている。他の各話での検討が今後の課題として残されていよう。(2006.11.14)

Étude sur les *Comptes amoureux* (4)

KAJI Yoshihiro

Nous avons abordé l'étude stylistique des *Comptes amoureux* en analysant le cinquième conte de ce recueil , épisode connu de la chasse en enfer, par la comparaison du texte original dans le *Décaméron* de Boccace et des deux de ses traductions, l'une par Laurent de Premierfait au XVe siècle et l'autre par Le Maçon, contemporain de l'œuvre de Jeanne Flore.

Nous avons examiné ces textes sur les plans de la syntaxe et du vocabulaire, qui rappellent les deux grands facteurs caractérisant les textes narratifs du XVIe siècle proposés Alexandre Lorian, l'emphase et l'imbrication.

Dans le texte de Jeanne Flore, qui est influencé dans une certaine mesure par l'italien de Boccace, l'ordre relativement libre des mots, l'utilisation de l'imbrication analytique et mixte et l'emphase avec le binôme synonymique contribuent à produire, tout en soulignant l'aspect dramatique de l'épisode, un style assez rapide, bien clair et très fleuri avec une attention marquée pour les figures surtout en nombre.